

「金石とりっぷ大作戦」 イベント報告書

1. 企画者

代表者:徳田碧波(高田 A4 ゼミ)、飯酒盃凜(金光ゼミ)
企画者:飯酒盃凜(金光ゼミ)、岩城来実(高田 A3 ゼミ)、加藤花渚(金光ゼミ)、徳田碧波(高田 A4 ゼミ)、中川里奈(高田 A4 ゼミ)、松尾暖香(金光ゼミ)、川辺優(高田 A3 ゼミ)

2. 概要 (要約)

本活動は、金石町において小学生を対象に野鳥観察体験を行い、野鳥への親しみを深めるとともに、自然環境への理解と関心を育むことを目的とした。加えて、大学生が子どもたちに身近な先輩として学ぶ姿勢や多様な価値観を共有し、将来像を描くきっかけを提供するとともに、地域の魅力再発見や愛着形成を通じて、将来的な地域活性化へつなげることを狙いとした。

活動には小学生を中心に 6 名が参加し、観察や交流を通じて自然や人との関わりに対する気づきを得られる機会を設計した。しかし、参加者数は目標に達せず、今後の課題として募集方法や周知体制の改善が挙げられる。一方で、子どもたちに自然や地域への興味を広げる契機を提供でき、地域の特性を活かした取り組みの有効性を示すことができた。今後は、参加者募集や運営体制の工夫を重ねることで、より多くの子どもたちに届く活動として継続・発展させていくことが求められる。

3. 目次

- 1.企画者
- 2.概要
- 3.目次
- 4.はじめに
- 5.実施内容
- 6.結果と分析
- 7.考察
- 8.今後の展望・提言
- 9.まとめ
- 10.参考資料(アンケート結果)

「4、はじめに」以降の節を次ページから展開する。



▼使用したポスター

4.はじめに（目的・背景・準備）

○背景

大学生として自身が学生生活の中で得てきた学びを、社会貢献という形にのせて結実させたいという思いを出発点に、今まで身につけてきた人間環境学部の専門科目やゼミでの学びを私たちらしさと捉えてそれを子どもたちに楽しく伝えられないかと考えた。

○目的

①野鳥への親しみを深める

普段の生活の中で何気なく目にしている野鳥を、「ただの動物」ではなく、共に地域で暮らす仲間として認識するきっかけとする。

②自然環境への理解と関心の促進

野鳥の生態や種類を知ること、自然環境への理解を深め、将来的に自然保護への関心を育むことを目指す。

③小学生の興味・関心を広げる機会にする

野鳥の観察をきっかけに、自然はもちろん、生きもの・地域・人との関わりなど、さまざまなことへの好奇心が広がるような体験を提供した。子どもたちが「もっと知りたい」「やってみよう」という気持ちを大切に育む。

④大学生ならではの視点や姿勢を届ける

大学生という少し年上の存在だからこそ伝えられる、多様な価値観や学ぶ姿勢、物事への向き合い方を共有する。子どもたちが将来の自分を思い描くヒントや憧れに出会う機会とする。

⑤地域の魅力再発見・活性化

金石町が野鳥観察に適した地域であることを体験を通じて知ってもらい、地域の新たな魅力を発見する機会とする。

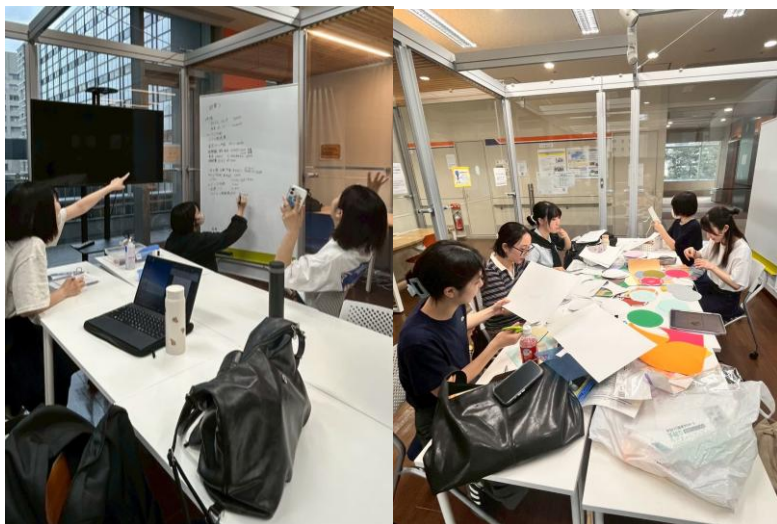
子どもたちが地域に愛着を持つことが、将来的な地域活性化にも繋がると考えている。

○準備

- ・企画案を持ち寄り、目的や対象をしっかりと踏まえながら内容を選定、スケジュール決め
- ・実際に町屋と連絡をとりあい、子どもたちになにを行いたいかを現地でアンケートを取ってもらう
- ・詳細がかたまったところでチラシ制作を含め、広報を開始
- ・プログラムに使うものを事前に用意、アンケートの内容決め

前日

- ・金石町家（仮）イベント会場設営
- ・金石町家（仮）にて参加者呼び込み
- ・健民海浜公園でワークショップで使用する材料収集



▼事前準備の様子

5.実施内容

ー実施体制

法政大学・人間環境学部 高田ゼミ 金光ゼミ

ー実施日時・場所

- ・令和7年8月22日（金）晴れ
- ・石川県金沢市金石西1丁目27_13 金石町家（仮）アトリエ

ー活動内容の詳細

【当日】

13：30 集合（@金石町家（仮）アトリエ）

事前に用意した名札を配り、小学生にはお絵描きなどをしてもらいながら開始時間まで待機。

14：00 イベント開始

始めに、参加者と大学生の中を深めるためのアイスブレイクとして、名前と好きな生き物を紹介し、その後、事前に用意した「生き物クイズ」をパワーポイントを使用して実行。3択クイズや○×クイズを10問ほど準備し、積極的に交流しながらクイズを行った。

アートは、コルクボードやうちわにオリジナリティー溢れるデコレーションをして作成。午前中に健民海浜公園で収集した木の枝や葉っぱ、松ぼっくりなどの自然材料、そして、あらかじめ用意しておいたシールや色ペン、リボンを使用。

作成中は、参加者と会話をしながら開催者も共にアート制作をし、交流を深めた。参加者との会話の中で、地域や学校のこと、そして町家の話など、金石町についての様々な話を聞き、学びや理解を深めることができた。

アート作成終了後、参加者にアンケートを実施。

16：00 イベント終了→参加者解散

アトリエの片付け、町家さんに挨拶



▼アート作成時の様子

▼クイズ中の様子



▼広告前での集合写真

6. 結果と分析

- 参加人数→6人（内訳：小学一年生4名、成人女性2名）
 - ・猛暑による安全性懸念のため、午前中の野外活動を中止し、午後の屋内を活動のみに変更→参加者に快適かつ安全な活動を達成できた。
 - ・小学生4名の参加:法政大学学生と小学生の交流のみではなく、小学生同士の交流、参加者同士の交流を通して様々な側面からの交流拡大ができた。しかし、年齢層に偏りがあったため小学1年生だけでなく他学年、他年齢層の交流が希薄であった。
 - ・成人女性2名の参加:内訳として、Aさん（町家を日常的に利用している）Bさん（地元に住んではいるが、町家を初めて利用）→町家の利用頻度の異なる2名であったが、小学生、

大学生との交流を通してより町家を身近に感じる機会となった。

・工作活動:町屋近くの公園で採集した木の葉や松ぼっくり、枝などを工作に用いることで自然環境を身近に感じられる機会となった。

7. 考察

今回の企画においては、集客不足が大きな課題として挙げられた。その要因は「広告の方法」と「企画内容」の2点に整理できる。

まず、広告の方法にはいくつかの課題が見られた。図1に示す通り、町屋での聞き込みや小学校へのチラシ配布、友人経由での紹介によって小学生層を一定数確保することはできた。しかし、SNSを通じた広報は大人層に届く一方で、対象とした小学生には十分にリーチできなかった。このことから、小学生を対象とする場合にはSNSよりも、学校を通じた配布物や直接的な声掛けの方が有効であると考えられる。また、募集方法としてGoogleフォームを活用したが、その存在を周知する媒体や告知の時期によって集客効果に差が見られた。広報時期については、一か月前からの早期告知と二週間前の直前告知という二段階で行うことが有効であると考えた。前者は予定を立てやすい層に、後者は直前に予定が空いた層にアプローチできる。加えて、ポスターとチラシで告知時期を変えたり、チラシを裏表両面で工夫したりすることで、より幅広い層へのアピールが可能になる。さらに、地域新聞での告知も有効と考えられるが、その場合は事前準備に十分な時間を確保する必要がある。

次に、企画内容の面では、対象を小学生に限定したことが集客不足の一因となった可能性がある。大人や親子を含めて対象を柔軟に設定することで、参加層の拡大が期待できる。特に、企画の目的が「環境学習」や「交流」にある場合は、対象層の拡大がむしろ目的達成に寄与すると考えられる。さらに、小学生が普段どこで遊んでいるのか、どの時間帯に参加しやすいのかといった生活リズムに配慮することも重要である。平日の放課後に設定する、あるいは学校と連携して日程を調整するなど、参加しやすさを意識した工夫が求められる。

本イベントの開催を知ったきっかけは何でしたか？
7 件の回答

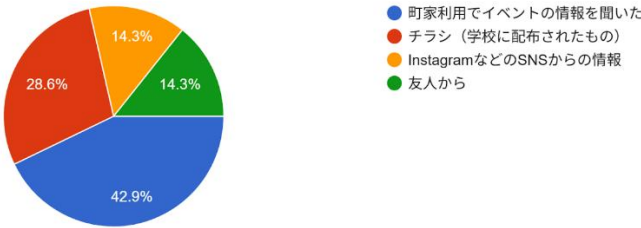


図1 イベント参加のきっかけアンケート

8. 今後の展望・提言

【展望、次回のイベントイメージ】

今後の開催時期については、夏以外の長期休暇、特に春休みが適していると考えられる。その理由として、対象である小学生が旅行などで遠方に出かける可能性が比較的低いこと、学校を通じた広告の効果が期待できること、さらに気候面でもイベント実施に適していることが挙げられる。加えて、可能であれば春休み中の登校日に合わせて実施することで、参加しやすいの向上が見込める。

広告に関しては、前回実施した方法を踏まえ、明らかになった改善点を徹底的に反映させることが重要である。具体的には、対象層に合った媒体の活用や告知時期の工夫により、より効果的な集客を実現できると考えられる。

また、企画の目的については大枠を維持しつつ、対象者や状況に応じて柔軟に内容を調整することで、より多くの参加者を受け入れられる体制を整えることが望ましい。これにより、当初の目的を損なうことなく、幅広い層の参加を促進できると考えた。

【提案事項】

- ・レターパック（追跡の機能を利用した効率化）

チラシを郵送する際は、レターパックを用いることで双方が安心してやりとりをすることが可能になる。重さを量ってから購入することを推奨。

9. まとめ

本イベントを通じて、運営側は多くの学びを得ることができた。地域ごとに文化の違いがあることや、世代の異なる参加者との交流を通じてニーズや関心の差を理解できたことは、今後の企画に生かせる知見となった。また、駐車場を貸し出してくれたカフェをはじめ、地域の協力を得られたことに対する感謝の意識も深まった。

当日の運営面では、小学生が次第に打ち解け、口数が増えていった様子から、交流の場とし

での意義を改めて感じられた。さらに、当日の空白時間を避けるためにレクリエーションを多めに準備したことが功を奏し、常に予期せぬ事態を想定して準備する姿勢の大切さを学ぶことができた。

加えて、学生主体の企画としては、自主性や協働性の成長という点で大きな意義があった。特に、十分な人数が確保されない状況から集客を含めて企画を進めた経験は、実行力を高める貴重な機会となった。また、社会人との関わりを通じてビジネスマナーを学ぶことができた点も、学生にとって実践的な学びであった。

これらの経験を踏まえ、今後は反省点を改善につなげ、次回以降の企画をより充実したものに発展させていくことが期待される。

10、参考資料

参加者アンケート

